

スキーという趣味

大 井 正

カメラは好きだが、SLを撮るのは趣味ではない。スポーツは好きだが、体操やマラソンを趣味とはしたくない。麻雀、碁、将棋の類は、自分が勝負事に凝る性格みたいなので、みずから敬遠してきた。そして、この室内遊戯は、フィールドが狭いので、自分をここに閉じこめたくもない。

もし飲酒を趣味のなかに数えることができるなら、女性を相手にしてたわいなく飲むのがよく、男を相手に飲むと議論をするので疲れる。

概してわたしの趣味は戸外のものに傾いている。いまでは、スキー、テニス、登山である。このうちテニスは、フィールドが狭く、相手があり、したがって勝負があるのだが、最近意外にこれに熱中している。これは、さきにも述べたように、勝負事に凝りそうな、わたしの性格に無関係ではない気がする。その点で多少自戒を要すると思っている。

テニスは少年時代にやったので、ように取りつけたが、スキーのシーズンオフのトレーニングのつもりだったということで、わたしの趣味としてのスポーツの本命はやはりスキーといえようか。

スキーで、わたしがいちばん気に入っているのは、高い山地に上って雄大な光景を眺めることができるということである。だから、わたしは、自分がよく入るスキー学校にも、外国名の、こちょこちょしたスキー技術に生徒をあまり熱中させないように忠告している。リフトを十分に活用し、ゲレンデのできるだけ高い個所まで昇り、技倆に応じた滑り方で、下まで滑ってくる。このときの滑走の爽快さは、狭いフィールドのスポーツでは、とうてい味わうことができない。テニスで、うまいショットを打って相手を負かしたときの喜びなんかは、これに比べるとケチ臭くて。テニスは、相手がいるので気を抜いたり、油断したりすることができない。スキーは、これに比べると、自力に応じて、い

わば自己満足しながら滑ればよい。しかし、自分で両方をやってみると、スキーの方は、のんびりした性格を養うのに都合がよく、テニスは、ひとを悪くする効果があると思う。いつでも相手の穴探しだから。

いまスキーを自己満足のスポーツだといったが、これは一寸放言である。スキーには立派な相手が存在する。それは自然だ。自然といっても、急斜面や緩斜面そして、いたるところにできる雪瘤。深雪に、堅い雪。サラサラ雪に、べた雪。ザラメ雪。これがスキーヤーの相手である。この地形と雪質に応じて、くり廻ったり、深みにはまり込んだり、ひっくりかえったりする。

そうしているうちに上達する。地形の難所と、悪質の雪を滑りこなす。スキーは、人間を相手にはしていないが、孤独ながら意識を板に注中して、スピードを克服する。そういえば、スキーは、孤高の戦いといえよう。

しかし、スキーを趣味としてみると、それがひとりで楽しむ遊びと断定するのは、軽卒である。というのは、スキーには、アフタースキーというのが付属してはじめて、ワンセットの趣味となっているからである。

アフタースキーには多勢の仲間が集まる。酒だって、歌だって、お喋りだって、場合によっては睦言だって、豊富にある。スキー場はたいてい都会から遠いので、特殊の雰囲気の中で、ひととひととが接触する。町のなかの狭いフィールドで、スポーツをやったあとビールを一杯飲むぐらいのつき合いとは、別の仲間意識が生れる。それは山仲間のそれと似ている。男同志でも、男と女同志でもざっくりばらんなつき合いである。だから、「間違っ」て結婚してしまうのは、たとえばテニスなどの場合よりも多かるう。

しかし、これは趣味の問題からはずれるから、これ以上いわないが、スキーという趣味からアフタースキーを除かないように。